

有家者、可不鑒前失而防未然哉、

〔文德實錄〕嘉祥三年五月辛巳、嵯峨太皇太后崩、壬午葬太皇太后于深谷山、遺令薄葬、不營山陵、

略○中 太皇太后姓橘氏、諱嘉智子、父清友、少而沈厚、涉獵書記、身長六尺二寸、眉目如畫、舉止甚都、寶龜

八年、高麗國遣使修聘、清友年有弱冠、以良家子、姿儀魁偉、接對遣客、高麗大使獻可大夫史都蒙、見之

而器之、問通事舍人山於野上云、彼一少年爲何人乎、野上對是京洛一白面耳、都蒙明於相法、語野上

云、此人毛骨非常、子孫大貴、野上云、請問命之長短、都蒙云、三十二有厄、過此無恙、其後清友娶田口氏

女生后、延曆五年爲內舍人、八年病終於家、時年卅二、驗之果如都蒙之言、后爲人寬和、風容絕異、手過

於膝、髮委於地、觀者皆驚、略○中 后自明、泡幻、篤信佛理、建一仁祠、名檀林寺、遣比丘尼持律者、入住寺家、

仁明天皇助其功德、施捨五百戶封、以充供養、后亦與弟右大臣氏公朝、臣議開學舍、名學館院、勸諸子

弟誦習經書、朝夕閣閣、時人以比漢鄧皇后、

〔慈慧大師傳〕天慶九年丙午、僕射父藤原師輔於楞嚴院營法華三昧堂、集衆擊燧而誓曰、若因三昧

力、光榮家族所擊之火、不過三、便擊之、火星迸出、不至再僕射、手以此火點長明燈、于今不滅、乃以此

宇屬師之法葉矣、

〔愚管抄〕三九條の右丞相輔師は、兄の小野宮賴どのに先立て、一定うせなふとまらせ給ひて、

我身こそ短祚にうけたりとも、我子孫に攝籙をば傳へんに、又我子孫を帝の外戚とはなさんと

誓ひて、觀音の化身の叡山の慈慧大師と、師檀のちぎりふかくして、横河のみねに楞嚴三昧院と

いふ寺を立て、九條殿の御存日には、法花堂をまづ作りてとりて、大衆の中にて火打の火をうち

て、我此願成就すべくば、三度が中につけてうたせ給ひけるに、一番に火うちつけて、法花堂の

常燈には、つけられたり、いまに消すと申つたへたり、さればその御女后の腹に、冷泉圓融の

兩帝より始て、後冷泉院まで繼體守文の君、内覽攝籙の臣、あざやかにさかり也、略○中 させてこの九